新板
繪入

新鑑草

三

ロ 9
3448
2

横濱 本五 木村屋

第一　王優鷄を助けて水難を遁れ幸をうくる事

元の代至正年中に南京の城中に王優と云人あり此人ハ原蘇州の民なりしが其比ハ天下に大乱起り時に蘇州の城主張士誠が為に悩され一人の朋友孔僕と云者と密に云合せ己が蘇州城を逃出て南京の方へ来り名を備宅しく渡世の営をなしけれども天下乱世なるにより商売ハ尽く絶なりけれバ漸く日数を経る程に孔僕ハせんかた尽てしまひ己が銀難に逼し故王優僅の手織を分て銀之百目孔僕に借しけれバ孔僕大に悦び此銀を以揚州へ趣き別れし渡世の営にて見しとく王優に暇乞して揚州に

3448
2

勅を儀乃者賞とるゝ之くなし平二嚴修り已
しめる所小王優小備し三百貫の銀と賞くこたけり此
時六乃王優と亦女孩と共小雛祭に及びしの孔璞
小備し三百貫の銀と共もとうんと思ひ南京の川ばり
孔よ来て揚州よりの彼孔璞小絹ひくさるもたと
同じ同じもこと貫の波世の後著しひし互小打かてひ
あるふ王優小孔璞ごの貫しきもの成家し綾ひ右乃銀
とそといつとも差なしじ如じ此ものと云出さぬこと世
なゝ笑と思ひ胃て銀の波世とせざりる孔璞小王優
ごんゆとなゝしかるに王優も腐蔓小利の

くゝなる孩と共ひ銀雛をし心かんくさり今約束の心定
彼三百貫の銀をれしじるるうん絹を我貧窮乃体と料
知くしる成云出さるるして亀しるれぎるくく一盃の酒と沿
こゆ事し者にちんとちりひく何乃絹と教さんとせ時王
優此絹くとるこひとくと指し母なるるり王優急悲れん
と主しくかしもう美母絹と教しかい彼ひとこを孔
をべし我宜ハしい母絹と教りんとく孔璞よ向く同ひく
を是下何故を絹と教さんとしるや孔璞の同公小酒と
進んと思ハを何成者も何ゝざるひ良此絹と絹しく
者小ちんと欲を王優の同我今日ハ精とるり向て教し

行くてなくしてくく遂ふさ鶏くとたもけるう孔璞は鄭
と共に豆腐拓くと酒を酌べ竟と青くくく慈小酒とう進るを
優此東八宿し登船おれきく又一艘乃波船に使るし
船くく海と云五里ばかり走りける前に大風俄に起く諸人
船船おそれくを波に翻り覆る恙船一艘もなし優げ奈
し船も已ふ危くみくれば一船代来合ども各面々主乃
ちくくにくく共を佛と頼びうう斯る所に室中にう
琴有高く吹呼るやう此船乃内に假精をとし
文淡傷と作てるへあり必ず船くと壊て事なくまとい
まぐ云もうらうらて大風息無くくく牧り海上穏

まうくれば船中乃人くし此事を聞きて皆ひと
備へ此船乃内小美候精をしてろくわ〜もんば空し船と翻
しく抜しご一命脱まーき而小幸若人と素合方乃と脱を
る社悦しくれとく候精をしてろ内人い誰なるらんと
尋ち小王優法人よ答しく曰我那月箇様くれなるく
母親とたとそもんとて候精をしてろ中始祥小伝り
を王ご船乃京合どと一日小感んしくこやう若是下れ
法徳よわしくんば此船も芸小感こめ我しご一命もする
ろこに是下れ徳よ問く方乃と脱まおまこ小なるる悦
しくとて衆皆其恩と謝しふるるこれば去合れ問

よ大明乃古祖皇帝れ勅命伐蒙く備方と廻れ私訪ん
古をけるる南京城よ回く王優ご法徳小問くけやうさ
命伐脱まのるよ参しをれば老祖皇帝奥小関しも
こめ王優ご徳と感しく法人乃く王優と名出れ浪三百
五十　三百五十八日小王優小騨こめ回小法徳と行ひ悪神
の祟と蒙く船中れ者伐祈へしる元きぞくるる志しなり
回法いよく善と成ろ備ん浪と成く言をる永く
南京城小住せと表をくを勅命ひりをれば王優浪と祈
受しく欲れ乃涙と流し問をく法徳とをるひ
勅昌小こ人ろ滅小王優是一いの船くとをけるば

怪しみ云へども、若し乃起りて命を脫るのことなしとて、今又天子の聖恩と蒙り、彼を縁て
侍るの光天乃祐なり、実人吾といふ説よりこそ

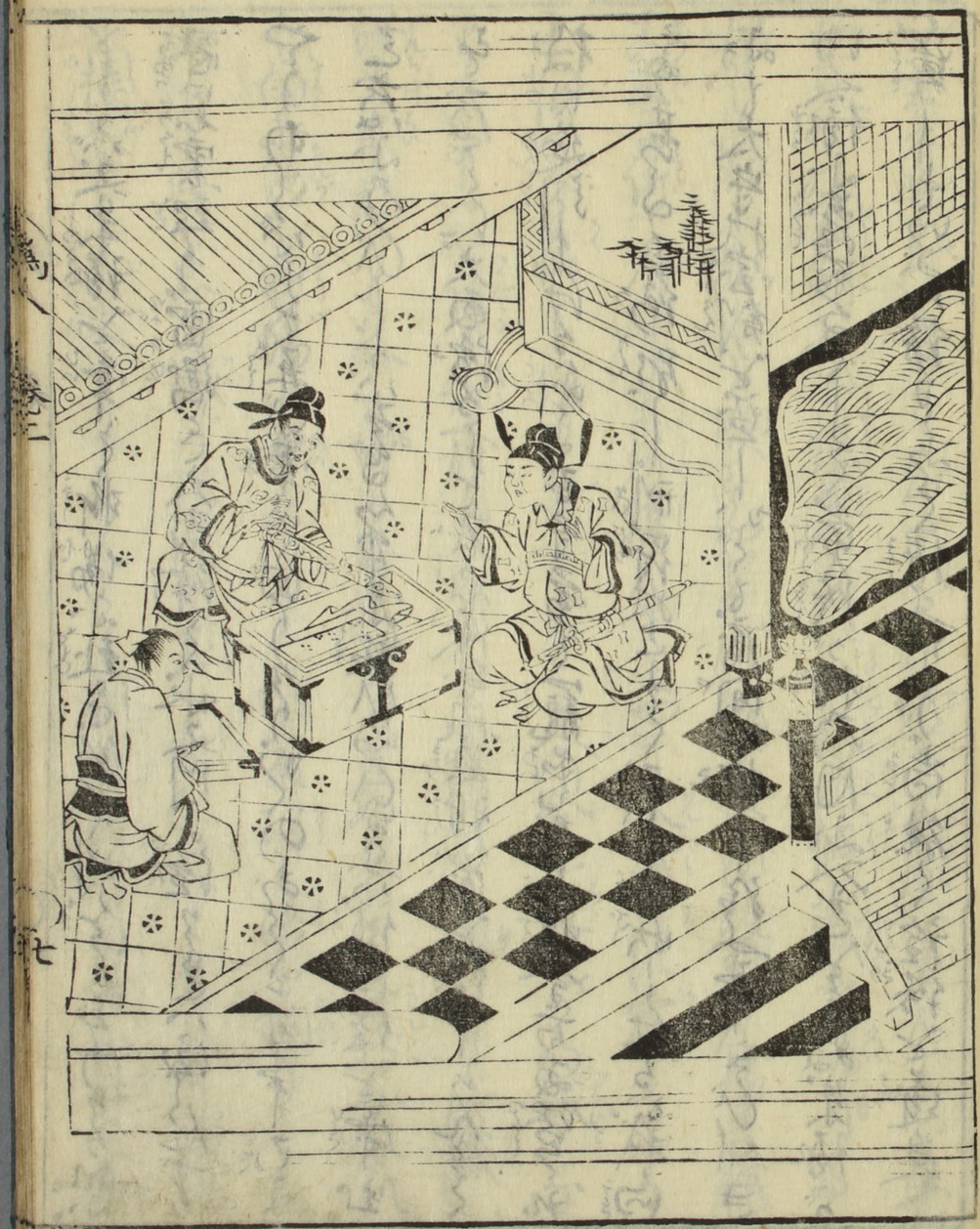
第二　朱孩主人と称んと願ひ、遂に遂人となりて
大明乃英宗皇帝の治世の時、廣東といふ所に一人の武
士あり、その名を常璞と号す、有数の蠻族なれども
小相撲の番頭を守り居たるが、俄に騒動して
常璞の中へ入と様子を窺へば、秘蔵の寶剣
を紛失の由、家中残らず點檢あるよし、常
璞も其代の蠻族なれば、立出て此詮議乃ありし

房間に通り搜しあるといへども寶剣見あたらず、
夫より明日主人林清といふ家来を呼寄せ、己に
房間々々を搜し、おもとの宝剣無くなりたる時
表の蠻族常璞が部屋へ入まさぐる樽乃内をも搜しに
紛ひなきとて、林清作と奉る前垂を取り主人乃下知
に同じく常璞下れ樽をも搜しに、もしや常璞元来何ん
もなかりもせばいざ知ず、用の〳〵代紙に搜しまくり那樽を
取出すに、林清自ら樽を穿ひて内をとるに、彼宝剣此
に隠し、林清おもに宋まさく興を失ひ初めていたく常璞を
疑るき無剣いうんで我樽乃内よりや我賈て記るし

いひくれ、林房に言く、主人小所あるに、大小姫の先常
陸と迎ひ、主人の時小常陸の僕朱孩と言者自らの小杉りの
拔うち、原来正直めしの一点も邪なしいふやうく創
ぬきこなうんや、拔き出た其剣拔乃四ふるとハ、ふ流血立ぐと
主人自ら家と、おもし、涙く恩と施しまへば我ら方主人命に習
ふ、今の恥と言ぐんハ生れ誤なるんと思ひ、中小一四の汁と
誤て、其器小血と出く、跑落しまれば常陸朱孩ゲんくるとと
ぬ、敵とうつやう、彼者数ひ我小事人未曾て表ひるこ
きず、今宵俄小家と出ろよハ、必定拔ふのん明朝まぐ四ふ
ぐんくと、ぐく身うせんくく、暁まぐ待ゲれを立小消息

なりしうべ常陸涙流ひくく、ハ、ぐとうくく方く弱れば
主人ハ黄昏一人朱孩と捉つく四りけ、常陸密く問ろう、
汝ハ何人家くと出く跑落をしや朱孩頭と低て一言も言ぐ、
常陸言ぬうぬ、汝若言ふいくぐんハ刑罪小行なしと
罵しうべ朱孩涙と流して云ふ、我ハ和主人ハ流て去る
の府裏ようく幸宝剣と盗ぬく出ろれども、黙査さび
らくく義さんくくろ亦なく擅ふ主人の拔刀開ひくく主四ふ
人き亜ぬぬきに四くく主人小賊くとうぬ、乗方小疑をつけざれ
どく何くやうん心弛ぬ、密密安くくげう同小夜晴ふ四ぬ
為しぬ、中ふ、ぬ、今朝くく推東ぬ、死ひくく我

今と思ふ者院北言と申くく大よ弱と沈いんぐ去守乃宝
剣と海んで我小飛辱とけるくーぞや美沈と指べどんば戦
小賊名小死くぞ源小飛とみきしもぞー忘たるか祈くく決
と請んとくく望物文書試他へくたるか敬ど太守文書と
みくきしくく因我承来者院ぐ正なり事と知るー有道固
ん紙一決ちくくく思ふ和ー果ーくく今幸人めるるまくる社
幸なれとくくこ自者院ご因見と宥ー朱豫と祈幸み
紛りめ移ふ幸作等朱豫と幸く幸く斬場ー乗く有ー俄ふ
大雨降て途中川ー法水奮ー蛇と浸る事紙つどーく
実く幸く四りもこ自ろくく体万里雲寿く貝和ふり



しうばつ又朱塚と幸く新場小社を渡く川を越りる際
忽ち雲起り雷鳴き大雨降く水川より溢れ海へ流れ
やうわ〳〵と喜び幸く四方へ分れ行くのおくこころ幸
こたふるべしとしうばつ又もるん市小姫ひろいまよ八代因徒と幸出
て衣ごとに大雨降ることなく不思議の儀と信しうんとく
拔日延しけるゆゑ守常く寵愛乃小性金百丈落れ
ぬ其ゆゑ刑罰とまく呈くに白状しける我向
ふし太守代宝剣と盜し奪ひ幸こびしき
ゆゑ傍小姫取るくしく常陸乃国小金とをぬ朱塚が
盜しといふ訴ふく作小尚紙く詮議と遂まへこ

いで守牧書と受くく書ぶ受るこ紙く朱塚と呼んで問ふ
ゆゑ我宝剣我小性盜めらしたる紙小賊小を作り
自ら罪小落んと欲もゆゑ紙に絵くハ紙故わん様子紙
書直し訴ふ作ふ朱塚復んで云やう本城已に露きる
とハ作のとう藏し作うんとく藏ふ人乃命と救んうる城とふ
ア〳〵一年一〇詳し訴へける太守ゑと少落ひく斜めまして感
涙下幸ひしとハ作ふ忠義と思ひ直あるこを考ふるれ
ゑ向小海と新場小幸ゑしるごとく大雨降く強と揺りしを
天ようと海ふ忠と感じ知ひて死と拔ひ入と笑くくう我汝
と撞琴く武使くうんとく則常陸と因儀小任じ幸

姓の女と云へる朱塚の家をしめ給て常陸深く朱塚が忠
と感じ給へる親子の縁と結んで彼の女睦しく朱塚天下
の今一の孫義貞の嫡男として佳名千載に伝へる乱人
ともみ新くしたるとへども欲心蔽て武八遥懇
の恩にそれ迷小忠義と忘きたる非道となる此の嘆し
き事ども看官ん〻留め給へ

第二　謝延恩心起りて人相変じ行る事

大宗代咸和年中に四川の城下に謝延といふ者あり有日人相
と看れ義ばつかやう是下代相の城主にて多き吉形わり
心善きまとひくけ乃もるくと行る人家程のもとに告

をしに謝延大に悦び時乃もるくと人々を遣しを待ク家に
く喜ばくえん法と送るくとなるらしに校謝大成ク方の
使く来接と偽り水を大成置て四海二十小作り行ひて菩と
知ずるや海の如き恩人の来接と与へんとて食ふらんと
強仰まるしめとて曾く無りしに謝延大に怒り中の
不と嘆き晴小ふやう叙るれば謝延と苦く恵と求し
る為に情なくもかく養しかや我まく城まるうしに海が一
家と滅さん拙とて家と折く拵と叙と怒るる事肯
隨に徴とり有日又彼人相とる翁に遣ひしに翁強ひて
曰ふく下代相の為悪おの事〻めるや定めず不善とのの

わ[illegible]ん[illegible]う[illegible]祝延義[illegible]我が[illegible]不善[illegible]事[illegible]とう[illegible]ば[illegible]ぬ[illegible]に[illegible]
相の悪しく変じたるこの[illegible]両人共に悪徒なるまで義の日相ハ
ひよ[illegible]ん変ずる者なり心善なる時ハ相も亦善なりに悪
なる時ハ相も亦悪なり故ゆえ[illegible]源徳と行ひ[illegible]
らば[illegible]下紙不善なりとい[illegible]弟小悪事[illegible]
さ[illegible]ば[illegible]ば[illegible]同じ[illegible]程なり自然かう[illegible]
[illegible]ぞや祝延此一言と聞く叔と恨しるとひかしに小
悔くいひるハ我前日知る方ふ行ふ[illegible]世[illegible]業と求[illegible]れ
よ叔延と[illegible]ぞ[illegible]なり[illegible]ば[illegible]剣[illegible]死と[illegible]生[illegible]る[illegible]我[illegible]く[illegible]
[illegible]武恨若[illegible]分しく城[illegible]叔の一家と滅[illegible]と

[illegible]ひ[illegible]扇[illegible]打く拳[illegible]人と立ぬ[illegible]ぬ[illegible]悪[illegible]ん此[illegible]
毛[illegible]も[illegible]へ[illegible]ず[illegible]と拍[illegible]く[illegible]下此[illegible]悪[illegible]と[illegible]
[illegible]ゆ[illegible]相恩変しく城[illegible]福[illegible]なり[illegible]れ[illegible]き事[illegible]
[illegible]嘆[illegible]れば祝延[illegible]悔し我不圓[illegible]小業[illegible]て悪仏と[illegible]
[illegible]備[illegible]る善[illegible]を行く我世相と[illegible]び原の[illegible]に[illegible]
しゆんや宜く此紙と[illegible]義の日[illegible]下遠国[illegible]悪心[illegible]
徹して伝海[illegible]と起[illegible]り故小[illegible]悪と行[illegible]
天の咎[illegible]く其相と変ぜ[illegible]り[illegible]下[illegible]く善[illegible]と行
ひ[illegible]と悪[illegible]起り[illegible]如く伝海[illegible]会[illegible]ば
原の善相と変ぜん半路[illegible]ん且[illegible]紙[illegible]

鶴人 巻二
十一

鶴人 巻二
十

善とけいひまさわ〜ばせ〜九歳弟を省べ〜とく嬉小教つく
別さけら謝延年と名と伯〜善心と紀一偏に張徳と
修学二三年過しめ共相承ぐ〜に喜びて城主
ともに年紙ひ共徒に問とく〜〜有もろ所門善年代
行ふ功ともに西門ぜん寺に出されく学問の職と拾い一生
を守れ幡下小在〜年六十修して年ぬ是と以惟こと
絶ひ恵年〜となるべと云て恵んと起を時に共衆一あり〜く
天の答と蒙り遂に福と共に共通古今小説に載せり

著述　程沖法徳と申て相変じて本書

大明の宣徳年中に雲南城に程沖といふ人ある共父の

原文宿あり〜名を紀人なりし時〜。程沖が幼き時病死ある
故程沖未父の志と待ど母と共に蠶居れ孫ひ〜ありけり。二十一
歳の春都小とて〜学問と勤んと彩ひ遥〜南京に上洛して
名師と素光に従ひ専勤学し〜二月修り〜〜名れよ。一
人道士程沖が相と看く大に驚き共下人を門に死ま
たし〜ぎ起て回て宣く孫遂徒と告きれば程沖教
こ四疑ど雨五日師に別きく南京雲南城へ俗
有り有貴性の家に宿と信〜〜休歇せ〜如に共家れ主
四十三歳の母と近づ〜〜共管哭悲もり。程沖んの門
小ちまて代情〜と部主と嘆んで同ひくろ共下伝ゆ

悲しうこのつゆ若極まるわしくべ清りの金が曰我ん祖ーうるは
不足日なるが今年不作しく年税とろ新米ひろと
地方より第しく催促きとうきとうと已事成りぞーく親子三
人三方に分と寄くく年貢れ不足と泣てん欲ひ一夜日月間
小家と棄て発足ねと這回親子三人三方に別きなば悪
者ん米ん不足ちんぴかかく悪作くく泣て流ーー
徳ーーーーの程沖怨加衰きこと催ーくいやう親子三人と
常小方と寄くく扨き行ぐ悪ーく思ひるん館家日
みし哀哭さ推量くきく痛哀こと侍き結きハ今我
二人と以親子羅漢と助進ーーん移小日哭と休まくと云主

所その人宮仕と云く我雅俗と板ものや程沖が曰思ん年
税代不足小幾程の有しぐ金が曰ぼ十ぬ和の銀ハ百貫と云作りまう
程沖哭くく足厳程ー我幸給銀代作ものり足と借進ー
ものこと乃分と寄年と休まくく懐中ーうり銀五十ぬ和の銀ハ百貫と云元
出ーくまく小借ーん小金銀とくく恰と獄中と通きくん花
ーーーん大小勢ん程沖とこ有ーくいつやく我いくうん仏神
のり合ん代影くく公小宮く借ー進くを乃くん大寄小部ーや
備此銀と借ーく地人小歎ーーのぐ公銀と脱きんぐ足ーの
母づまども公治銀と分こと我小備ーーーで怨く小遠治し
旅不使ちんまくまぐ銀と立くく公小年穴せまくくん

ゐ我銭財を惑はしてとゝく・毒を捧げ逃げ・れば程沖
が笑ふ・こゝろ・皇下毒を・れ・まく・と・寄・ま・つ・べ・ば・只・宮・に・ま・ま・と
收め・我今は・と・ゐ・と・云へども・強・程・尚・を・ま・ま・ど・況・四・
寒も何ともなくて・顔・に・涙・と・流・し・ば・を・毎・恨・ま・ま・
ゐ・公の・ゐ・れ・ば・新・俄・に・哭・ま・ま・ま・ま・ま・程沖
涙・と・拭・て・云・ま・ま・我・這・四・ま・ま・と・勧・め・ま・ま・四・川・ま・ま・に
よ・し・如・と・二・人・の・ま・ま・我・相・と・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・
又・遠・く・ま・ま・に・聞・り・作・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・何
の用・ま・
ま・

三百里の路を送て恩と謝し・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・
の風起く・行林の内より・一つの猛虎跳り・ま・程沖と・ま・ま・ま・
ま・程沖・大に怕ま・魂・脇に・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・
ま・ま・我が母を・恩人と・虎に・咬・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・
ま・猛虎に・頑・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・
跳・ま・に・跳・ま・と・用ひて・良久・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・
一人の猟人・弓・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・
落・ま・立・寄・て・弓・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・
ま・虎の左の眼に中て・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・
遂に虎と頑伏す・彼猟人・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・ま・

しき者なれば小立者にて程沖と投起し危さ命を拔し
小程沖深く其恩を感じ誠の等乃力にあらざんば何と
我命を脫きんやと涙を流しこれを人に語りける事公已に
此程のことを聞くと必百年以壽を保結んなれ
やと恭しく先と賀し遂に別きて國に歸り依程沖に誠
小虎四郎と脫きて行る四川より兵部卿と乃て
記の事を伝れを普國にして年も恙なく越年し
春の立にもりしかば程沖弟に紙ひとつやう彼乃人相
とる事天下に名とれらく國中の人の傳ぎて遠く其年我
相とるを苦て有お遠しこれ社不義なれ共今日再

び法して学問と勤め具相とを看なれ共なんとなひて
年代秋四門と立ぬ南京小より又代遣士と等く根とを世
乃に道士忽脫て曰我去年生下れ相とを一時忽ち
命く傷ひ相のりもるが命恙れきもるべ大人相よ
変じこれ社不思議なれ共根大善根とかしなと見ひり
極めて強く強ひ程沖が曰我善根とれ
見人いなれども遂中代張南小於く簡候こ代中乃りぬと
ぬ主に退と与へるを中美に虎小達して昭徳詳
よ行りを尋ぬ道士に問て曰乃大徳なりしかを
脫きを行のこの人相視を恐心ど近年代四小宮人

とゝのつべいとなく伝德と仲しうとと教々しく程中人式
恨なせ今く道士が言と信ずゝ者ゆへ船を発す
ずとゆゝく次乃年進士乃第の中ゝ遂ゆ川の主寺に住を
らわく始て錦と衣を回り喜び家内と振こゝ父さん志を
徒よけゝとれば程中若沼と恨んぐ主親あゝ離別ともく
もん彼日虎れるゝ食とゝられ豊人今日乃福人わんゝ旅
法德と付て祠を福くと脱きゝく神ひと得ゝ中多一春人
思ゝ結人ゝ乃ゝ

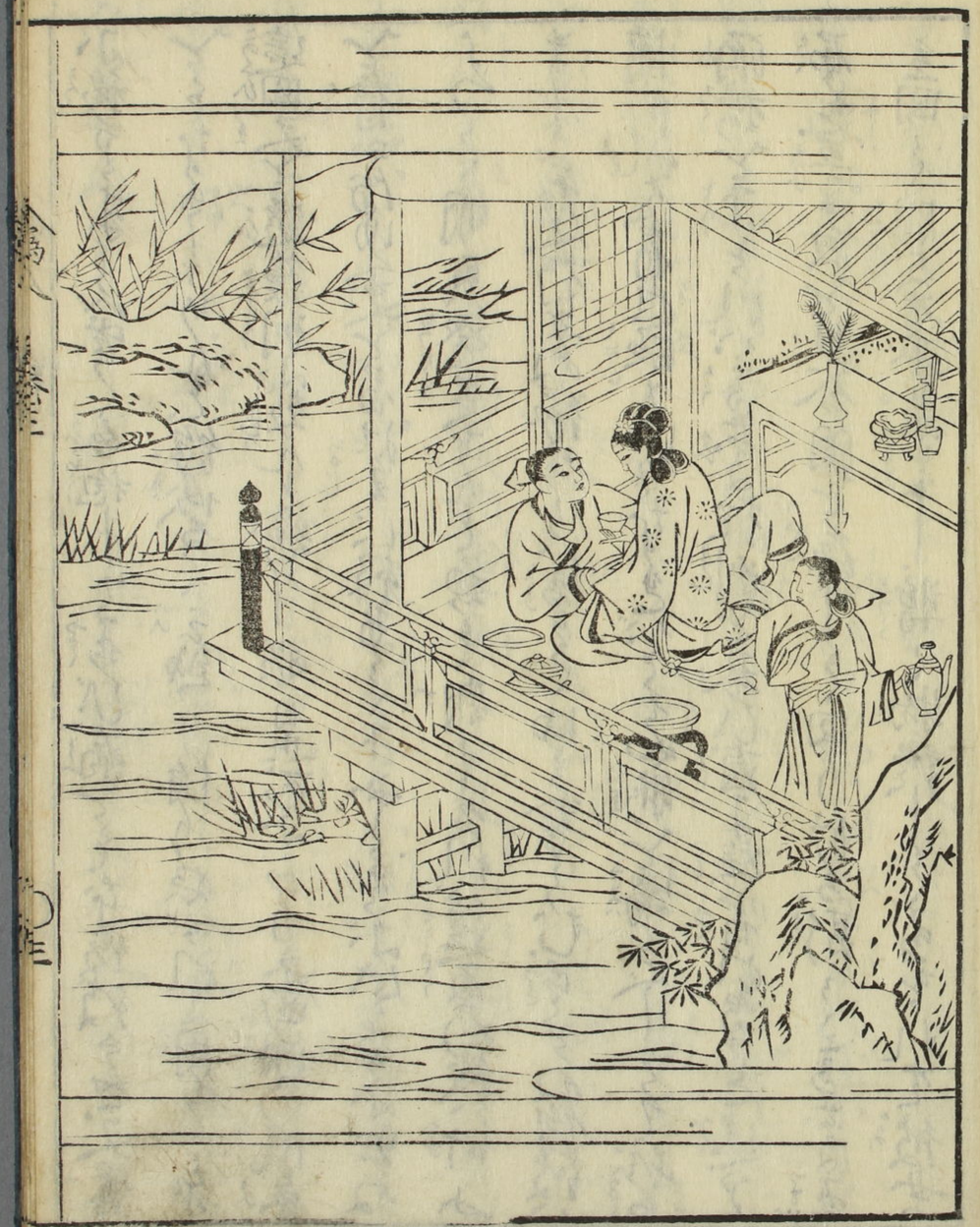
新編巻之三終

第一　高慶不義とゝして福人と失ふゝ事

大唐乃孝宗皇帝御治世代沙村抗州とゝ所ゝ高慶と云義男
わり学ゝ才人ゝ越へ立身乃望深くして高勤そゝ志ゝ暑
日代ゝ中に怠ゝ人ゝ東さん霜と凍螢窓ゝ眠とわゝれく
詩と賦一文と作ゝ己ゝ精神疲ゝ省日朋友と三人誘
ゝ西湖乃ゝ景ゝ出閑景と遊覧して興と深ゝ楽ゝ而に
年代法二十計乃女ゝ人ゝ下ゝ歩と倦くゝ島ゝ乃ゝ熟
やゝ女ゝとゝに恰西旅ゝ柳と合る振ゝ地ゝ美容式ゝ乃ゝ
ゝ乳鬢ゝ付ゝやゝとゝる者ゝ見ゝ魂と執ゝ所ゝ標致女ゝ
世ゝ比ゝ人ゝ人ゝ思ゝ去来戯きく一興と傳ゝ人ゝ圓り

三人は朋友と酒肴を侍りて、女の後に随ひて、二町許
をうしなはんと顧て、微打咲て、眼中に情と含て、
むとして、泪を流して、語る者、実に哀れ、若しは義人と一
度枕をかはすこのまうべき歟、遊女の情、此の如くなる仕業
は、世を傾て、向は酒楼に登て、高楼に倚て、
やうに振舞て、下女に近付て、晴れ渡る月の、
婦人に成て、下男と共に、眞実に、此方に、若
彼の戸まで、暗夜、あくり、食物、
恋うの事、我幸、
思ふの事、

丁寧に、
顧て、
風の、秋波と、
考へて、思ひ、通ひ、
こめ、當て、
て云ける、此酒楼、
の侍人、文人、
ならん、女、



うばさるるを早くと酒と求めて女小勸め流し酒奏と催々に
女も高きを勝るる器を代るく盃をくみ合はせ
わらめ掘母乃よろべ生てみと打解て向しに枕とかくしぬまんら
も涙ざる輝なるを今や天上の樂も是にはよもあらじ
思ひ感悦斜なるを〻〻女よ同へるるバ若いろう用るみる面
変化のまり毎日毎小餐を〻〻ぞんと同じや若紫をうん江戸首
も尚遠義〻〻〻〻世間く滅小石恩徒乃縁ゆくべらん
もふまく〻〻〻〻何乃福うもふめん結きた只恨つき
ら我原妊濃〻〻〻〻信〻者なるぶ我夫多年痛小邪〻〻家
衰へめら加藤乃の親孝ども方〻〻切く書〻〻〻〻美藤乃

小移り来しべきく外抱してまた再び病ともなく後ぬけ又昔
とともなきしめんと欲せきく立ち出でて行くに関うくに都
這回又と透蔭別小刻んと欲しく明日此所小西湖乃風景
と看て向山又と看れば遠に新秋もくて下女とそうふさらに小出ぬ
ちうく明日発足せんと思うに朝一くれば遠乃後ハけ
まじ若し打ち和ちうべ事うく面うくまうむ所ちうに後ハ
惜されを看れ給もいでなきべうとうて勝うべしうて
酒樽と下きしべうの者ども打別と暴ひ直ち旅宿れうこと送り
原を立て奥と見谷間と落しうく回りける者ども
立回うく朋友ども小ん小ん小しうく滑く物語しうるを此彼

ちうと想出しうに悲嘆とうく熱ひ乃又あうく乃ハ
ども怪と思下伊予中有うく樵ひ者ども者ども
なうくうう何とかん胸痛ども性どようく一座し興と
出ひ待りぬ茶回り作りんとうく各所つき拵完小座る程
小ども者ども彼此ども中と暴ひ暴うくハ暴ども
附んうう思うとうく乃ハ胸と焦しうく已小年暮乃ハ乃
まう始小なりうう小ども乃ハ乃ハ小出けうう
我と者ども者ども中ども者ども小ども及者小中ども者ども
宝しうく的ども者ども者ども者ども者ども者ども者ども
及者ども者ども者ども者ども者ども者ども者ども者ども

手づからくこと年乃年せごろ[illegible]同[illegible]乃[illegible]
とくくに味ひ[illegible]ろ[illegible]ると[illegible]ひ上ハ神明と祷
[illegible]助と求ん一度乃[illegible]中く此亜と雲うんとく関帝[illegible]
薩と礼拝[illegible]愛敬丹誠と[illegible]ける[illegible]有[illegible]
[illegible]小関帝[illegible]薩高[illegible]と[illegible]くのゝ海ご文ハ諸人ハ
勝きこれ[illegible]中[illegible]大官[illegible]成[illegible]者[illegible]
[illegible]年西湖乃[illegible]人[illegible]書と[illegible]檀小不保[illegible]
[illegible]天[illegible]ひく海ご[illegible]減[illegible]
第[illegible]と[illegible]妄想と[illegible]中[illegible]
[illegible]く失[illegible]ると[illegible]く[illegible]悔ひ[illegible]

小迷きくるの[illegible]と[illegible]小梅いん年人の書と[illegible]く
不義とする[illegible]天罰と[illegible]
[illegible]小[illegible]神明小[illegible]乃第[illegible]
居[illegible]世[illegible]西湖乃[illegible]
[illegible]一生[illegible]
[illegible]人[illegible]に礼義[illegible]
[illegible]若非道乃事と[illegible]
減[illegible]中と達[illegible]
第二　鄭士[illegible]義人と[illegible]
大明乃永楽年中小揚州城内小鄭士[illegible]男[illegible]人

天然聰明にして幼さより詩を吟じ琴を弾じ
書をよくし遊山玩水を能くして抑揚洲と云所に勝れたる
上國なれども男女ともに閑雅なる風俗美麗なる事なれば他國にも
世にもまれなる美人と聞るゆへ世に招し者をいかにもして遊興と
都へ諸方に官人へ賞をつかはすに北國の世たちや十二三
の比より好色にして人と暁し偏に閑雅を愛して万ふるまひ
とりわけ男女に交をしかたと鄙之長者にそなはる我妻ひとり國
よりまもなく物をもいはんと思ひ合て着来一人の白
若衆招かんと思ひ着くべきそなたと夢くに一生快く楽しんと
ひとり平生心と思ふに比類なきほどに月十四日に炮烙

と見れば若くして街に出て徘徊し美をよそおひ家
こに華燭と照し熱閑なるに怠まる言語に表さんや世を
浪し貴賤貧富と論ずと男女ともに街にあふれ炮烙と物
しづかに市にぬくよりて集る鄙之長者と人に女伎に男女十
人ばかりおのづから静に歩のこ集る鄙之長者歌と舞とをなすに年の比
十二三歳ばかりに見へしかの幼なりけるが其清最閑雅に
しかも三十二相と具へ誠に神と迷ひぬべき美人にして
諸人驚き讃ずるばかりなりける鄙之長者忽況と御一我今こ
れ程美人と見れども我妻に優る者なし何とぞ簡程
の女と乞ふて我妻にせばと思ひ出なんと好り閑

俗すん殺害するにぞされど晴に泣かずつゐて宵もまた夜半をまちて
ならずこころを定てひかりくしに袖を入れまいば彼女もなく悔ん
しらく東北路とちて私宅にまで鄒之臣秘をと滾て窺ひ
ころに二女が国り入し家は張縣如と云て揚州に隠たる大福
人の居宅なり鄒之臣わやにとかやうせし女を張縣如が娘なるよ八
何者なるやと再三窺ひたる其所に小童僕一人出されば鄒之臣
是に問て曰今此家に女ありやといひし是女は此主の娘なるを何人ぞ僕
答て曰彼女は月仙姐と申て此家の息女なり鄒之臣此ことばを
聞て則歎じてと思ひ柱を押張縣如は近国に其名をしる大富なれど
人なれば定て貴人の家をこそ婿に入れんとならん我素よ

貧賤の身なれば中々叶ふ事にあらずと歎しける寧宗のひとたびとしれ
親しきものが流石捨るに勝ぬ情なれば又躊躇してんと惑ひけるや
きん角やと十方にくれまし思ひ戚も小国く案じ悩ひ衝目ねを送
あまる所に日頃睦しく語ひける朋友何青といふ者来りけり鄒
之臣を見て大に悦び是を下に招きおもひを云ひける時かのやう
は顔色の衰ぬるや様子なかりまへと問ひければ鄒之臣答て
曰我頃日一つの憂ひあるんぞと告しめ気力已に衰へ果るに
よつて日は消遣の為京城と所て遊びもしんと欲ふ公
が勝つならば誘引し侍らん何青聞て我幸得とぬるなりいざ
同道申べしとて二人宮城に出て城下をめぐりしき

と詠ぜし彼雅細をうるあり。其ちかく小一軒乃草庵あり。あるあ
ゝ誰かあるやと呼ぶ。一人の老僧椅子よりおりて曰。何
ぞ用事ありて問ふ。あるあ椅子よりおりて僧に
どうさうの風情をなす。鄙言小四ひ、ふ下何乃憂ふ
所ぞ。くるしみ多し。今我命を保ん事難うして
まつたく眞小極楽と云ふ。あるあ恵僧一言を示して此疑を解べし。
鄙之言葉を聞て曰。和尚我疑とぞ小解ひ給ふ。縁起を語りたまへ
と。宿あり。ある人法華ぬこの女と共に神と悩まる。婚姻
詳よかりしかども和尚悔しとて打笑ひ汝と法華ぬと法華
ぬ貧福等しかるべき事天地乃遠乃ごとし。されば婚姻さん

るに、人間一生六十なれば、三十にて戸を閉ぢて、緣と結ぶ
べき世間の法なり。汝今多年、富る人、女とたくふ。分
量に相違して、水中の月を捕んとするに似たり。汝、我讀と言
ふ。たくさん中、なんぢ、仏道と遂て、業花と言ふ。孫を演ぶ。
新婦問すべし。鄙之長、そこ、ゆくゆく、いよいよ、迷ふ。老僧、いるれば、分
量と知りの、心、ふかの善知識なり。んとすれば、即、礼拜して云
やう、我が、鄙之長といふ者、あるべき商地、居住をば、ゆく、教化と
受ん。あるべきと、達さんの宜しく、そこと、新婦言ふ。汝
の、ふかの、勤法徳とりの、感応、ん心、とゆく、信とを、感じ
時の、ふらくと待ゆく、立ち、と問ふ。中に、大官の、法る

るのんさる時、ゆくゆく、彼世、とそ、法華、始めん
法ゆくゆく、小貝と、言さんより、もの、問ゆく、学問、ともおしゆく。
之長、そこ、ゆくゆく、怠惰り、我、問ふ、ゆくゆく、とて、勤んとゆく、何者と
たる、小、老僧、と、抑ゆくゆく、抑、此、老僧、月、光、菩薩、と、言
知識、ゆくゆく、問ふ、未来、と、暁、しの、ゆくゆく、ゆくゆく、ゆくゆく。
梅鄙之長、ハ、そこ、ゆくゆく、と、立て、学問、と、演ず、原、徳、とり、
朝夕、ふる、中、なり、ゆくゆく、問、年、とゆくゆく、ける、新、小、学、高、大、小、秀
其、年、遠、小、進、立、乃、学、に、中、ゆく、輪、林、子、ゆく、学、小、落、りる。
之長、ハ、年、小、怪び、今、て、法、華、如、ば、女、と、学、んゆく、婿、と、ゆく、
かくゆく、云、人、ゆく、び、法、華、如、大、小、怪び、早、迷、ゆく、月、紅、と

鄙之民小嫁をもつて惟らに男たらんと欲する者
半ばにして、はんぶんとなつて而して後其所ひとを遂ぐ
師は教化の所なり、もんぶ徒に貴とぶべきを
達と為し、ただに禅師たん今言に従て学ぶべき勢位なる
し故果して如何試みに我一生いまだ嘗て孫武
業を学ぶ者を見ず、家に試みに孫武と
阿瀚小説とを書す

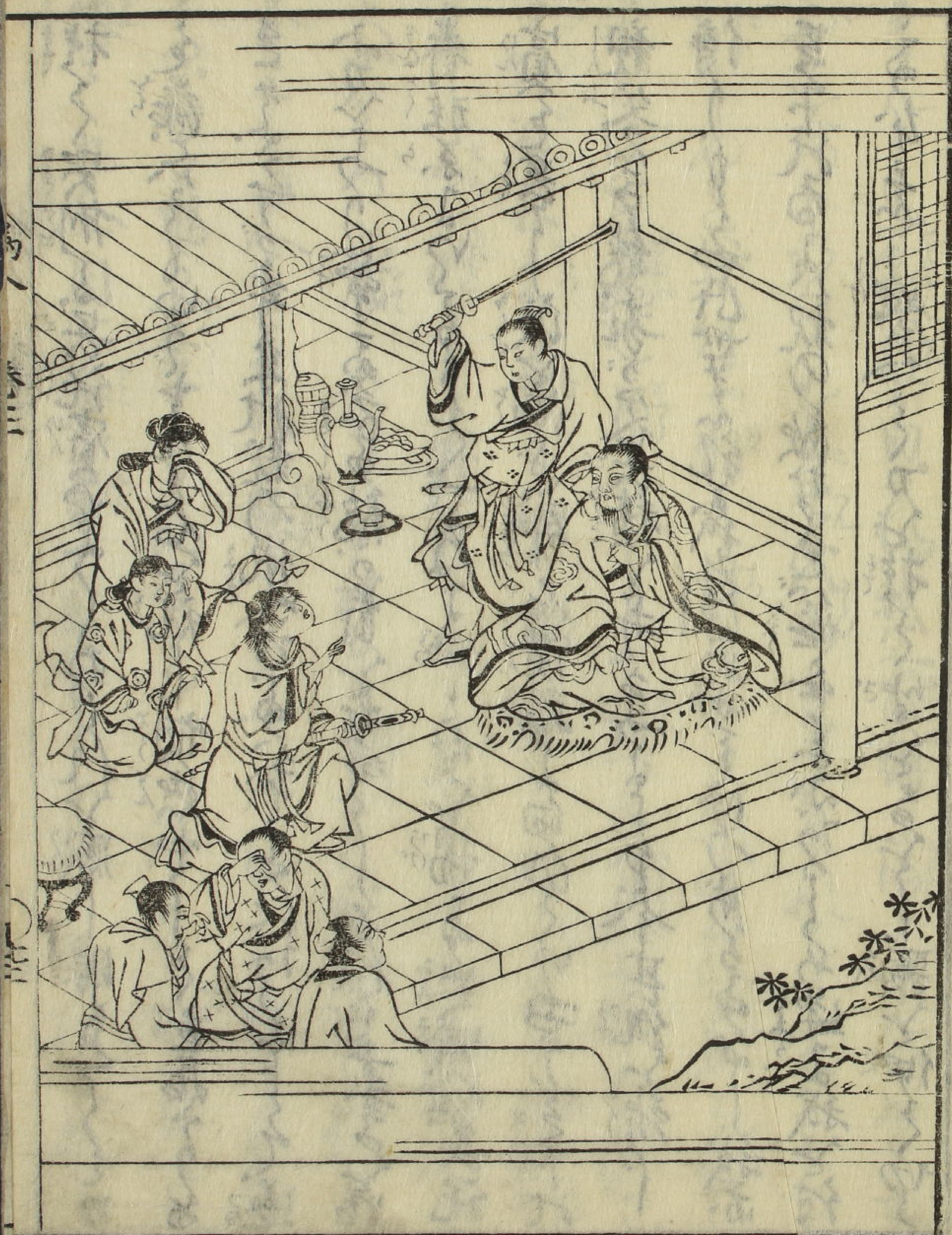
第二　呉托賓父乃佩を献ずる事

江西の城下小石子龍と云者あり、或日酒宴乃至して一時の忘
小糸じて朋友呉積と云者と頑戯し、直に廣東と云ふ所に逃

りしく外戦義し、年十五年にもなりけり呉積が嫡子呉托賓今
年十九さいのおりもろの父乃佩と云ふ人と共に
と連れ、石子龍とて備国に向ひ、石子龍廣東に於て妻
娶、男一女を誕生せり、兄石讃と云て十三歳妹八秀桂と云て
十歳の者總明にして共に兵藝なり、石子龍常に嘆
我荀目侯を知音なりと教し、今更悔恨すし、独り子を
我と怨み、我べし、家已に亡ぶ人乃子を持つ
を事かし、上を問へ呉積が父を約、我に親乃敵なり快
く討ものと頭を伸く討ま甘べ、仁義乃士と云るべし、
近く江西に聞り呉積父子と約んとて小用を調へ

の内に楽兵をきんとたくはへたる兵に董越谷といふ者慌て逃れ
石子龍に告ていふやう昔兄の為に討れたる呉の積が悴呉託賓
と云者呉下を尋て此国に来り上郡の城濠が窗を借りぬ。かまへて
用心し給へとて委細を告ければ石子龍悦び家に帰り夫を
吾討んとこそ思ひつるに今此家に来りたるは我為の幸なり
急ぎ呉託賓に対面し其上にて討んにはしかじとひそかに誘引し
酒を勧て持なしたる董越谷を此趣をまた説この妻子
此言を聞て大に驚き兇人に与して討んとは甚以ておろか
なり。弑君の罪を廻らし給へとて再三諫言を加へけれども石子龍
中々聞入ず。遂に呉託賓を招きて私に歓待をなしてけ

呉をしぞ聞て涙を流し我呉下にあり親父を討し時は我身いまだ孩提の子
にてありしが何とやらんかすかに覚え歳も長じ親父を生まして置べき
ざらんやとつねにこひ給ひしに我あだもなく張て再び親父を
害し今又寧梅巳に来るし是は我をつねにも呉下を狙ひ
来り討んとこそ思ひつるに邂逅此家にこそ来り合す事
誠に天の与へなり。快く我を討して父の恨をはらさんとそ願ひ
を伸しくしければ呉託賓甚感じて共に涙を流し
し。公の如き仁義の勇士を仇人に持ことそ我身の不幸なれ。免
し給はゞ従へども君父の仇には共に天を戴かずと云事あり。
我今公を討ならば必自害を遂同じく冥途におもむく



だし。おどろく相待あへとゝく腕刀を抜くうし猶小海たる二
ます子然賛ある刀を打振へ呉託賓とかく海が我が父を殺さバ
我父海を殺さん。神がるくも父をゆるしまへとゝく白眼の中に
日あかりいとも涸を流しまる二度ふのへりしくく山きん童くと刀んとて
君よりそれとりまつしぬ。時石子龍石饅頭と太ふ首らく
日まり。我首の呉使と討しゆへ今日又甚子にはらさ落周
呆辣賓乃石腥まん海小龍く八必呉託賓とうしとまそる
まご。我今討てといへども全く呉託賓と仇人とてあらし後
百一我が遺言小むしるべおま我が乃怪ハ詮くもかくうく海とう
らそんさ。議小ちひ切てろ係小あん今これバ石僕致屋へくかるに

拾ふく哭例る。呉託賞いよ〳〵わうれと感じ眼もくらくらと力
を落こゝろもいづくんとんと礼し惰然やう〳〵立ちうあ
きそ。うすゞ年来の親乃仇人はゆゑ、知こゝにつゞきて遂
ゆ力とより筆てゆゑ龍の貢と折〳〵あれど書こと結
養族ホよいるゝ〳〵一なよ嘲と愛と揚ゆ哭滅ゆ呉託
賞を芸り涙と酒ぎ即ち後刻よ向ひくいやうとくトれ
親父ゆ龍乳ゆ父呉横と折ゆ今其仇と殺ゞ
侍りゆうや世ん礼義を深ぬゆを心乃ゆるゆ〳〵我ホ
呉下れるよ親の敵なきゆ遂ゆ我と付
ゆゆ礼ゆと遂ゆ〳〵力と拾ふく生ときく〳〵頭と伸ふく切

き切ん〳〵と石横敬ゆ曰ふれゆ我父宿朔よ落〳〵けんゆ乃ゆく言
業と落しゆうゆ〳〵ど呉下代起ゆる事きゆれゆ〳〵ゆ事ゆ
制〳〵ゆきゆ我行ゆ敬ゆ〳〵ゆるゆゆんゆゆ上出家と遂て
父ゆんゆゆ菩提と帰ゆ〳〵ゆとゆゆ父ゆゆ〳〵ゆ
呉託賞其ゆと拾り知り自〳〵力とれ拾ふく礼と頭と制
落しゆゆ龍しゆゆ花ゆ〳〵ゆ乱ゆけゆ二度乃ゆ
大ゆゆ〳〵ゆこ儀〳〵ゆ〳〵ゆ我ゆ勇ゆゆゆ〳〵ゆれと
ゆゆ上ゆ人ゆん善拾と懲ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ結〳〵ゆと
ゆゆんゆゆ龍ゆ妻子ゆ下に乃ゆゆゆ〳〵ゆゆゆゆ人ゆ
懲ゆ九人ゆ同に賛と旁て出家ゆゆゆゆゆゆゆゆ

義と知り嘉と感じる人ちからぶ
人をうる命ずる人をうる重び美さぶる人をしりしりうや
う

新編竹取物語巻之三終